

豊橋鬼祭における氏子町の役割の展開過程

沢田 優希

- I. はじめに
- II. 対象地域と祭礼の概要
 - (1) 吉田城下町と豊橋市街地
 - (2) 吉田城内の寺社
 - (3) 豊橋鬼祭の由来
- III. 近現代における役・神事の展開
 - (1) 役・神事の展開過程
 - (2) 展開過程の要因
- IV. 現在の豊橋鬼祭の体制と継承
 - (1) 豊橋鬼祭の次第と運営組織
 - (2) 各町の豊橋鬼祭に向けた活動
 - (3) 豊橋鬼祭が継承されてきた要因
- V. おわりに

I. はじめに

都市祭礼研究には、祭礼自体を研究対象とするものだけでなく、祭礼の運営に関わる人々や地域を対象とした先行研究がある。

歴史地理学においては、中近世の祭礼を対象とした研究が進められてきた。渡辺¹⁾は、祭礼形態や内容、場所、関与する人々に注目し、祭礼のみならず、神社自体も城主の交代などを契機に変化し、その変化や担い手、住民構成の変化の度合いが祭礼の変化の度合いと関わる点を指摘した。本多²⁾は、祭礼時に共同体が表す空間構造に着目し、その共同体間の関係性や市街地形成との関係を検討した結果、祭礼時に表れる現実とは異なる空間構造から、過去の空間のあり方を解明できると

した。さらに渡辺³⁾、本多⁴⁾により、祭礼を運営する共同体が相互に対抗関係をもつ例も示された。

遠城⁵⁾は、近代の都市空間における独特の「共同性」を明らかにし、近代化する都市では、脆弱性に直面することで「共同性」が強調され、その回復に寄与したと主張した。また、平⁶⁾は、現代、人口が減少していく都心の中で変容するコミュニティを考察し、町会会員の親睦を深めるものとして、祭礼の重要性を指摘した。

近年、佐藤⁷⁾は、地理学における祭礼研究では、都市構造と祭礼の運営の関係を上げてきたにも関わらず、祭礼の継承自体の考察を研究の目的としていないと指摘した。もっとも、祭礼をとりまく問題は一通りではなく、継承の仕方も多様である。それゆえ、地域性をふまえ、祭礼とそれに関与する地域との変容を詳細に検討する歴史地理学の視点から、祭礼の継承について考察することができよう。

そこで、本稿では、都市祭礼の継承と展開過程の一事例として、近現代における安久美^{あくみ}神戸^{かんべ}神明社^{しんめいじや}の豊橋鬼祭の展開過程、その担い手としての町の関わりの変遷について検討する。その上で、今後の祭礼の継承についても考えていきたい。

豊橋鬼祭は、旧吉田城下町の氏子町で現在も行われている。同祭については、山崎⁸⁾がその由来や意義について考察しているが、都

キーワード：都市祭礼，神事，近現代，豊橋鬼祭

市祭礼研究として行われたものはない。

以下、第Ⅱ章において対象地域・祭礼の概要を述べ、第Ⅲ章で、豊橋鬼祭の近現代における役・神事の展開過程を復原し、その要因を明らかにする。第Ⅳ章で現在の豊橋鬼祭を支えている体制を検討し、祭礼の継承について考察する。

Ⅱ. 対象地域と祭礼の概要

(1) 吉田城下町と豊橋市街地

吉田城は、16世紀初めに今川家の家臣である牧野古白により、豊川沿いに今橋城（のちに吉田城へ名称変更）が築城されたことに始まる。1590（天正18）年に城主となった池田照政⁹は、城郭を拡大し、町並みを整え、城の周りに武家屋敷地を配置した。以降、譜代大名が城主となり、明治に入るまで城郭および武家屋敷地が維持された。城下町は東海道五十三次34番目の宿場町でもあった。

近世後期の城下町の構成を図1に示す。総

堀の内側には藩士屋敷地が広がり、城の東部と南西部には足軽屋敷地が分かれて配置された。総堀以南には町人地があり、東海道沿いの表12町とそれより南に位置する裏12町の、合わせて24町が吉田24町と呼ばれており、本陣は札木町に置かれていた。

明治維新以降、城郭内には陸軍の歩兵連隊や師団が置かれた。初めに豊橋の名を冠したのは城下とその周辺で、1889（明治22）年の町村制施行時に豊橋町となった。その後も諸町と合併し、1906（明治39）年に市制が施行された。1945（昭和20）年6月19日の豊橋空襲により、旧豊橋町域を含む市街地の約70%が焼け野原となったが¹⁰、市民の尽力により復興された。1958（昭和33）年の土地区画整理事業により、市街地が整備され、概ね現在の町域となった¹¹。

(2) 吉田城内の寺社

近世には、悟真寺、吉田神社、安久美神戸

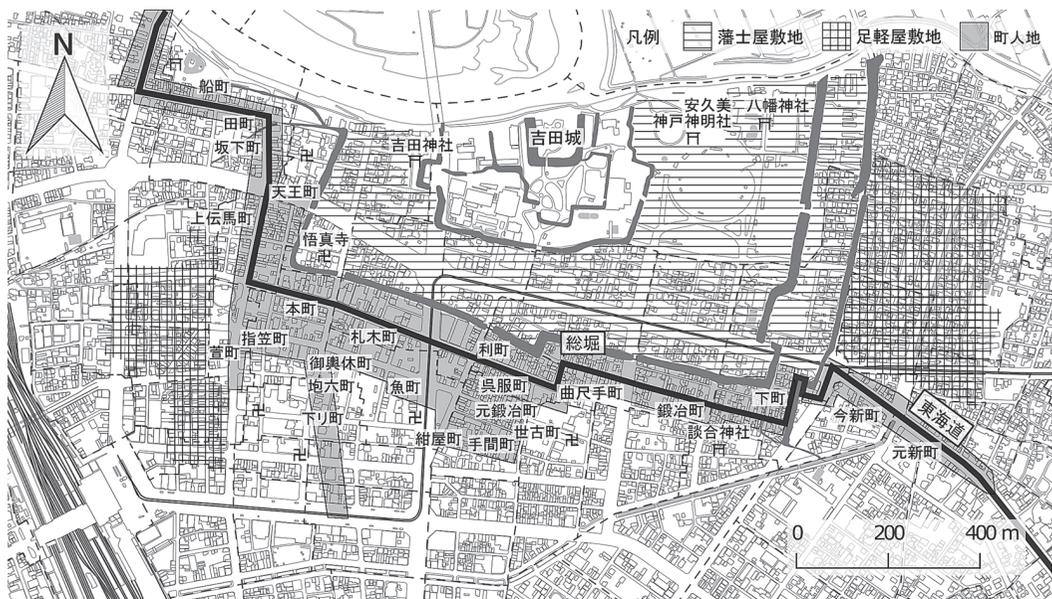


図1 近世後期の城下町の構成と安久美神戸神明社の位置

「吉田藩士屋敷図」、「三河国渥美郡吉田図」、「吉田宿絵図」、「東海道三州吉田宿絵図」（豊橋市美術博物館所蔵）をもとに、基盤地図情報に加筆。

神明社と八幡神社が吉田城内（総堀の内側）に配置されていた（図1）。

悟真寺は、1366（貞治5・正平20）年に善忠寂翁によって創立された。当初は吉田城の位置にあったとされているが、吉田城築城に際し現在の地に移転した¹²⁾。

吉田神社は、1124（天治元）年の創建とされている。手筒花火発祥の神社といわれ、城下町の西部、本町、上伝馬町、萱町、指笠町、札木町、御輿休町を氏子町として、花火や神輿渡御を行う祇園祭を行っていた¹³⁾。祭礼の際には東海道が封鎖され、城主が見物し、支援もあった。一度1872（明治5）年に廃止された後、復興と廃止を繰り返し、出される花火の種類の変更などが行われた。1897（明治30）年、境内での手筒花火、豊川の川岸での打ち上げ花火が行われたことに端を発し、以降これが定例となり、現在も毎年7月第3金・土・日曜日に開催されている。

安久美神戸神明社は、940（天慶3）年より伊勢神宮の神領となっていた地（現在の飽海町とその領地一帯）に、天照皇大神が勧請されたことにより始まるとされる¹⁴⁾。近世には吉田城の城内社となり、城内に配置されていた。1885（明治18）年に城郭が陸軍用地となるに伴い、安久美神戸神明社は中八町（現在の八町通三丁目）に、隣接した八幡神社は東八町（現在の八町通四丁目・五丁目）へ遷座した¹⁵⁾。その後、安久美神戸神明社は、空襲で焼失した八幡神社等の周辺神社を合祀し、現在に至っている¹⁶⁾。安久美神戸神明社の現在の氏子町は、飽海町、旭町、旭本町、西新町、八町通三丁目、八町通四丁目、八町通五丁目、札木町、呉服町、曲尺手町、鍛冶町、中世古町、前田町一丁目の13町である（図2）。御旅所の談合神社が位置する談合町は、安久美神戸神明社の氏子町ではない。

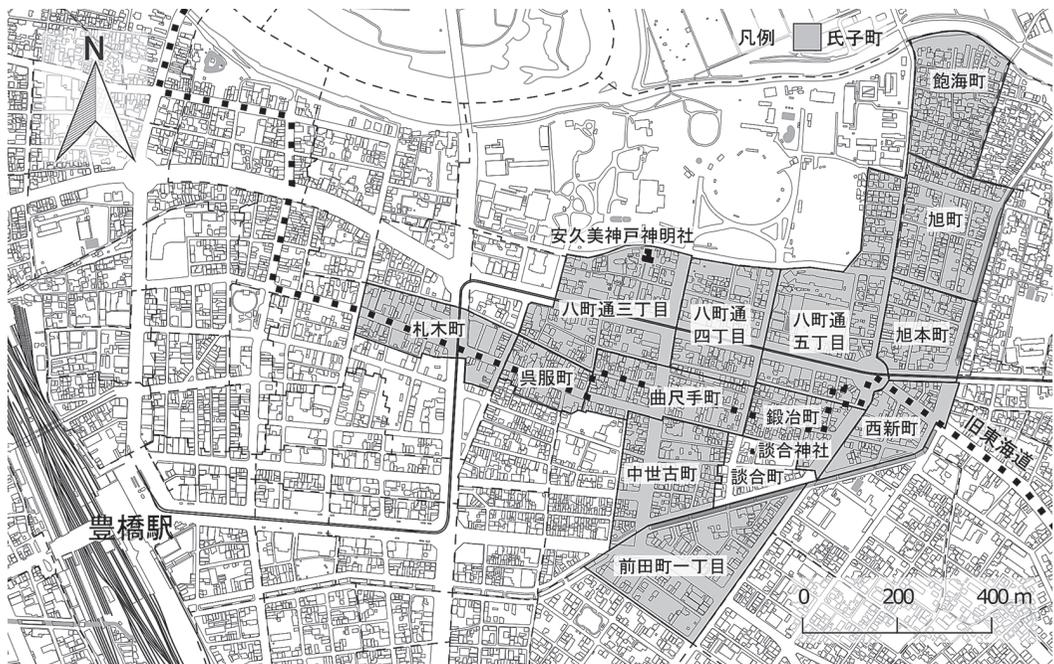


図2 現在の安久美神戸神明社の位置と氏子町
基盤地図情報に加筆。

(3) 豊橋鬼祭の由来

豊橋鬼祭は安久美神戸神明社の例大祭であり、2月10日と11日に行われている。

祭礼の始まりについては記録がなく、分かっていない。「鬼祭」の初見は1554(天文23)年に徳川家康が祭礼を見学した際の、「神事鬼祭御覧あり」という記述である¹⁷⁾。元禄期(1688~1704)ごろに、「赤鬼と天狗のからかい」の神事が中心となり、鬼が追われることに加え、その鬼が町内を廻る、見物人を巻き込んだ都市的祭礼となっていくという説もあるが¹⁸⁾、『安久美神戸神明社千年誌』をみる限り、1603(慶長8)年から1895(明治28)年まで祭礼に関する記録はない。

豊橋鬼祭は神事由来のため、第二次世界大戦中も中断することなく続けられ、1980(昭和55)年には国指定重要無形民俗文化財に指定された。現在では、豊橋市を代表する祭礼である。

ここでは、山崎¹⁹⁾の見解に沿って豊橋鬼祭の由来についてまとめる。

豊橋鬼祭は、修正会の追儼を継承していると、山崎は考えている。追儼とは、7世紀初めに中国から伝わった、災いをもたらす邪気を払う行事である。初めは方相氏が不可視の悪鬼を追い払っていたが、方相氏のいでたちが異様だったために、次第に追い払われる立場になった。これが現在にも通じる追われる鬼である。

この追儼が五穀豊穡を祈る行事となり、8世紀中頃から、同じく五穀豊穡を祈る行事である修正会でも取り入れられるようになった。追儼を取り入れた修正会は、追儼の担い手であった貴族の寺院でも行われるようになり、猿楽などの芸能を取り入れ、参会者に分かりやすいものになっていった。

追い払われるべき邪気が鬼として見える形で現れる修正会は、農民にとっても非常に親しみやすく、豊作を願う農民の志向と一致し、13世紀初頭には、貴族寺院の末寺となっ

ていた地方寺院や、小祠などでも行われるようになった。

この修正会の行事が、安久美神戸神明社の神宮寺であった海蔵寺から取り入れられ、さらに田楽の要素も加わり、現在の豊橋鬼祭の形になったと推定されている²⁰⁾。田楽は悪魔祓いや鎮魂、豊穡祈願の意味を持ち、修正会の目的と一致していた。その結果、現在のよう田楽や神楽からなる神事に発展した、と山崎は述べている。

Ⅲ. 近現代における役・神事の展開

(1) 役・神事の展開過程

豊橋鬼祭は現在、13の氏子町が役を分担して行っている(表1)。中世古町の赤鬼、飽海町の天狗・黒鬼の3つの役は神役と呼ばれ、特に重要な役とされている。この3つの役と旭町・旭本町の司天師、鍛冶町の干地・福地・矢取・御玉祝、八町通五丁目の御船引は大人が務める。他方で、西新町と呉服町の神楽児、曲尺手町の笹良児は5~7歳ほどの男児が務め、札木町の子鬼、八町通三丁目の青鬼は小学校5、6年生の男児が務める。曲尺手町の浦安の舞、八町通三丁目の天宇受賣命ら3柱の神と琴姫は女兒が務めることになっている。表1の二重線より下部は近代以降、新たに設置された役である。他に、前田町一丁目は赤鬼の補助、八町通四丁目は青鬼の補助を行っている。

現在の豊橋鬼祭は13の氏子町によって役が分担されているが、この状況が生まれたのは近世後期以降である。豊橋鬼祭は、かつて安久美神戸神明社の神領であった飽海町の祭礼であった。近世後期になり、全ての役を行っていた飽海町から、役が分配されていった。図3にその展開過程を示した。13町以外にもかつて祭礼に参加していた町や氏子町だった町もあるが、現在の氏子町が役・神事を得ていく過程を把握するために簡略化している。以下、役・神事の展開過程について、

表1 豊橋鬼祭における氏子町の役割

町名	役名 (◎は町内廻りをする役)	神事・行事名	役・神事の概要
中世古町	赤鬼◎		神役。前田町一丁目が補助。
飽海町	天狗◎	赤鬼と天狗のからかい	赤鬼と天狗が闘いの様子を演じる神事。
		天狗切祓	赤鬼の退散を知らせ天下を清める動作。
	天狗神楽	神職の神楽歌と太鼓の音に合わせて舞う神楽。	
	黒鬼		神役。からかい・諸神事を見守り、神幸渡御を先導する。
旭町・旭本町	司天師◎		太陽と月の饅頭傘をかぶる2人。
		司天師田楽	赤鬼が去り平和になったことを喜び合う田楽。
		司天師神楽	神職の歌とともに舞う神楽。
西新町	神楽児		子どもの役。
		日の出神楽	本祭の朝奉仕される神楽。
		御幸神楽	神幸前に奉仕される神楽。
呉服町	神楽児	五十鈴神楽	明治初年に中断した役を、戦後町が復興したため設置。神々の心を和め天地を清めるための神楽。
鍛冶町	干地・福地	矢取	御的の神事 矢を的に向けて射る神事。豊穰を祈り行われる。
		御玉祝	御玉引の年占 注連縄で結ばれた榎玉を引き合う神事。豊作・凶作を占う。
八町通五丁目	御船引		神幸の際、御頭様が乗る神輿を引く4人と、御頭様の向きを変える1人。
曲尺手町	笹良児	田楽ボンテンザラ	司天師の鼓、小太鼓に合わせて笹良児が拍子をとる。
		笹良児神楽	2人ずつ舞う神楽。
	浦安の舞		新設。子どもの役。宮内庁作曲に合わせて開始した神楽。
札木町	子鬼◎		新設。子どもの役。地踏行事（準神事）を行う。
八町通三丁目	青鬼◎	岩戸舞	新設。子どもの役。手力雄命がモデル。八町通四丁目が補助。
	天宇受賣命ら3柱の神		岩戸開きを表現した舞。
	琴姫		新設。子どもの役。
			新設。子どもの役。3人。

安久美神戸神明社『鬼祭の田楽と神事』1952。安久美神戸神明社『安久美神戸神明社千年のあゆみ』2012。
豊橋広報聴録『春を呼ぶ、鬼と天狗とタンキリ船 豊橋鬼祭。』2014をもとに作成。

図3をもとに述べる。

近世の豊橋鬼祭は、飽海町と、御旅所の談合神社のある談合町²¹⁾のみで行われていた。談合神社は、安久美神戸神明社の御旅所として400年以上の歴史があるという²²⁾。中世古町²³⁾に赤鬼が渡されたのは、1855(安政2)年以前と口伝されている(図3-A)。この中世古町は、飽海町の一部で神領だった。なお、幕末の中世古町は、現在の前田町一丁目も含んでいた。中世古町の人々が日雇いに出っていた札木町では、1882(明治15)年に子鬼を新設した。

1885年に安久美神戸神明社は現在地に遷

座した(図3-B)。呉服町に日の出神楽と神楽児神楽が渡されたのは、1934(昭和9)年以前である。この時期に前田町一丁目が中世古町から分離したため、赤鬼補助の役を受け持つようになった。1940(昭和15)年に皇紀2600年奉祝記念として、曲尺手町が浦安の舞を開始した。

第二次世界大戦中には、氏子町も甚大な被害を受けた。札木町はすべての道具が焼失し、終戦後2年の空白期間があったが、その間も氏子町による町の練り歩きは続いていた²⁴⁾。

日の出神楽と神楽児神楽を行っていた呉服

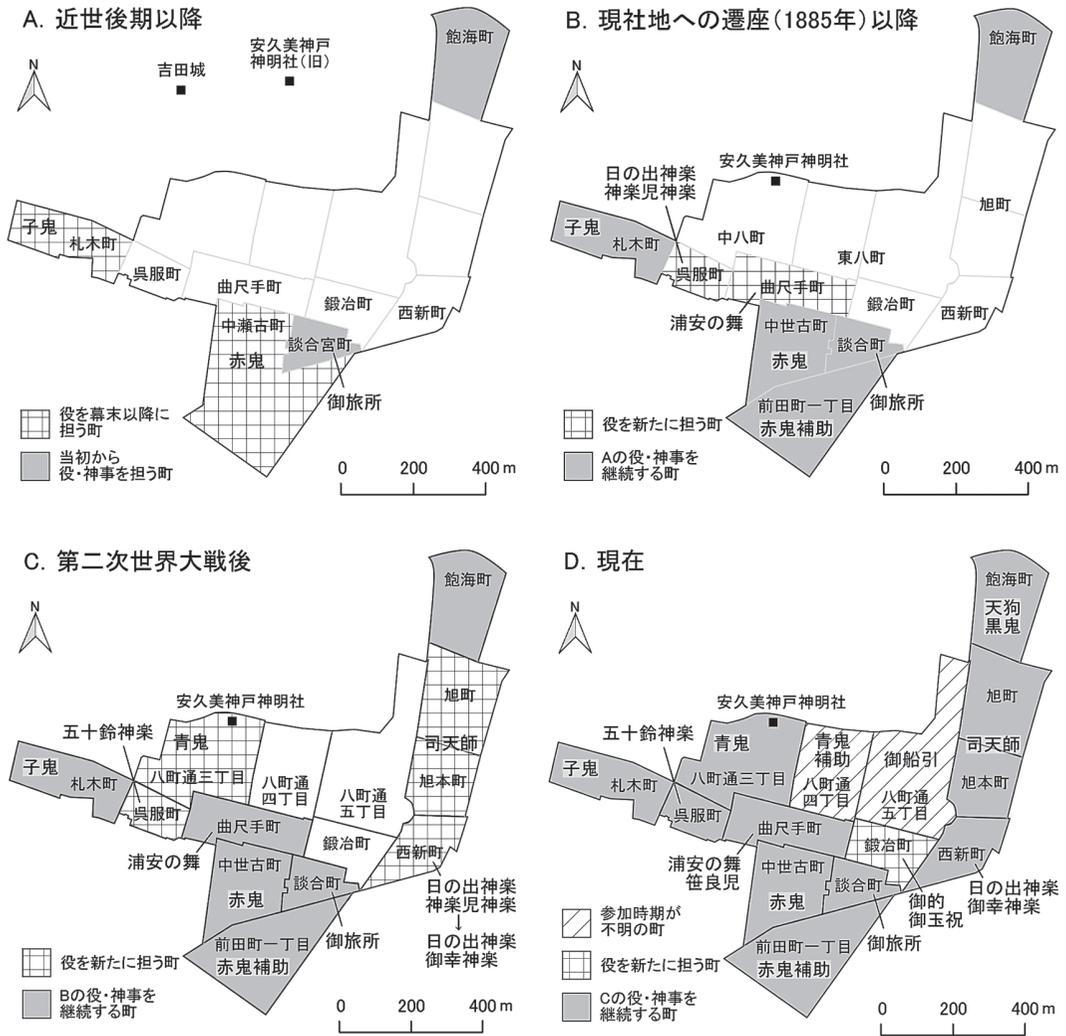


図3 豊橋鬼祭における役・神事の展開過程

豊橋市広報広聴課『春を呼ぶ、鬼と天狗とタンキリ船 豊橋鬼祭り。』2014および聞き取り調査により作成。
 各町名は、A：1878 (明治11)年、B：1933 (昭和8)年、C：1958 (昭和33)年、D：2021年時点の名称を示す。

町は戦禍を受け、役を継続できなくなった。そのため、役を西新町に渡すこととなった(図3-C)。また、1946年に旭町(のちに旭本町が分離)が飽海町から司天師の役を譲り受けた。この旭町、旭本町は、近世には足軽屋敷地であった。

1952 (昭和27)年には八町通三丁目が青鬼を新設、さらに呉服町が復興したため神楽児が舞う五十鈴神楽を開始した。それに伴い、

西新町の神楽児神楽は御幸神楽へと名称を変更し、現在は日の出神楽とともに行っている。

1975 (昭和50)年に、飽海町が務めていた御的御玉祝の役を鍛冶町が譲り受けた(図3-D)。現在では八町通四丁目が青鬼の補助、八町通五丁目が御船引、曲尺手町が笹良児による神楽を行っている。ただし、これらの役は開始年代が分かっていない。八町通の各町は、近世には、藩士屋敷地であった。

(2) 展開過程の要因

本節では、前節で復原した近現代における役・神事の展開過程の要因について考察する。

まず、赤鬼の役が飽海町から中世古町へ移った点は、飽海町と中世古町との関係性が要因と考えられる。中世古町は1721（享保6）年の『三河国渥美郡吉田郷神明社領帳』において、「同国渥美郡吉田曲尺手町裏中世古と申候是は飽海村之飛地」²⁵⁾と記されている。また、1781（安永10）年の『吉田中世古宗旨并五人組人数改帳』において、「御城内神明領中世古」²⁶⁾と記されているように、神明領と称されている史料もある。つまり、もともと中世古町は飽海町の一部であり、神明領であった。このことから、飽海町と中世古町との結びつきは、他の町よりも深いことが分かる。安久美神戸神明社の宮司への聞き取り調査によると、中世古町は飽海町の居住者の次男や三男などが開拓した土地であるという。

そして、中世古町の南に位置する前田町一丁目は、1933年に区画整理が行われる²⁷⁾まで中世古町の一部であった。中世古町の保存会役員への聞き取り調査によると、当時は、前田町一丁目からも赤鬼が出ていたという。区画整理以降は、赤鬼の補助の役を行っている。

次に、札木町に子鬼が新設された点は、中世古町と札木町との関係性が要因と考えられる。本陣が置かれていた札木町は宿場町の中心地であり、農家の多かった中世古町の人々が日雇いに出ていた地でもあった。その交流の中で、祭礼において役を望んだ札木町の人々が、酒1～2升で鬼運営について教えを受け、新たに鬼を新設したと言われている²⁸⁾。1951（昭和26）年には、子鬼について、準神事と認める覚書が出されている²⁹⁾。

図3-B以降の展開についても、飽海町とその町との関係性が要因と推測される。子鬼が新設された1882（明治15）年の段階で、役が渡されていなかった地域を大きく分けると、

近世の町人地、足軽屋敷地、藩士屋敷地に分けられる。この中でまず役が渡されたのは町人地の呉服町や曲尺手町である。両町は第二次世界大戦前から神楽を奉仕し、祭礼に参加していた。

町人地の中で鍛冶町が1975年まで役を譲り受けなかったのは、近世以前は安久美神戸神明社のみの氏子町ではなかったためと考えられる。「（談合神社の）氏子は鍛冶町と談合町の二ヶ町であったが明治初期の神社制度改正の際二重氏は認められないので鍛冶町は安久美神戸神明社へ属することになった」³⁰⁾と述べられているように、鍛冶町は談合神社の氏子町でもあった。そのため、役を譲り受けるのも遅かったと考えられる。

飽海町のすぐ隣、足軽屋敷地であった旭町³¹⁾に役が渡されたのは戦後になってからである。渡された司天師という役は、かつては飽海町の北東部にあった牛河若宮³²⁾の人々が務めていた時期があり³³⁾、ここでも、飽海町の人々が開拓した町に、先に役が譲られている。

そして、最後に役が廻ってきたのが八町通の町々である。八町通はかつての総堀の内部、藩士屋敷地に位置した（図1、図2参照）。これらの町は、戦後7年経っても役のない時期が続いた。特に八町通三丁目は、1885年に安久美神戸神明社が遷座してきた地であり、神社を持つ町として鬼を持ちたいという意見が出ていた。そのため、協議の結果、神事ではなく町内の行事として、行動範囲や時間、まく供物の種類、鬼の色は赤又は赤類似色は用いない、などの制約を受けた上で、青鬼の参加が認められた³⁴⁾。他の鬼が町内廻りの際にまいているタンキリ飴についても制約があり、参加当初は落花生をまいていたが、数年後には青鬼運営の実績が認められ、タンキリ飴がまけるようになったという³⁵⁾。ただし10年間における各役の町内廻りルートを見る限り、青鬼のみが飽海町に立ち入っ

ていない³⁶⁾。このように、新設の役には制約がある。

また八町通四丁目は、20年位前から青鬼補助の役を行っている。加えて、祭礼の日には御輿が八町通四丁目内を回るが、これ自体は豊橋鬼祭と関係がない。戦後、八幡神社が安久美神戸神明社に合祀されたため、御輿に御神体を移す精入れと精抜きの際に安久美神戸神明社に寄ることになっている³⁷⁾。

八町通五丁目は神幸の際の御船引を現在は行っているが、いつごろから始まったかは定かではない。

以上のことから、町の歴史的特徴、特に飽海町との関係が、役・神事の展開過程の要因と考えられる。

IV. 現在の豊橋鬼祭の体制と継承

(1) 豊橋鬼祭の次第と運営組織

現在、豊橋鬼祭の次第は次のようになっている。

2月10日は宵祭として、主に戦後新設された役である青鬼の行事が行われている。青鬼は、安久美神戸神明社での行事や談合神社への御神幸を行い、町内廻りをする。その間、子鬼の予習や五十鈴神楽³⁸⁾も行われる。西新町や鍛冶町のように町内廻りや御輿をする町もある³⁹⁾。10日の夜は夜宮祭として翌日行う神事や行事の予習が行われている。

2月11日は本祭であり、日の出神楽が始まりを告げる。例祭で浦安の舞が奉納されたのち、子鬼の行事と町内廻りが行われる。午後からは御的の神事が行われ、その後赤鬼と天狗が登場し、現在の中心的な神事である「赤鬼と天狗のからかい」の神事を行う(図4)。これは、赤鬼と天狗の闘いを演じたもので、神事にて追いつめられた赤鬼は、天狗に追い払われる。飴と飴粉をまきながら安久美神戸神明社より遁走し、赤鬼の町内廻りである門寄をしながら、談合神社へ向かう。赤鬼の退散した安久美神戸神明社では、天狗による赤鬼が

退散したことを知らせる切祓や神楽、司天師田楽、笹良児神楽、御幸神楽などの田楽・諸神楽が行われる。その後、御玉引の年占が行われたのち、談合神社への御神幸がある。神幸先でも神楽や天狗の切祓が行われ、天狗や司天師も町内廻りを行い、安久美神戸神明社へ帰還するのは夜遅くなる。

現在、豊橋鬼祭の運営は鬼祭保存会が中心となっている。鬼祭保存会は各氏子町から数名が参加し、行事部会、氏子総代、企画委員、楽部会の4つの部会に分かれ、それぞれ祭礼の準備作業を行っている⁴⁰⁾。4つの部会の中でも町同士の調整を行っているのが行事部会である。この部会は40年ほど前に起きた町同士の争いを調整するために設置されたという。鬼祭保存会は、新年度の顔合わせから祭礼後の反省会まで、時期によってばらつきがあるものの、ほぼ一年を通して会合が開かれている。特に12月からは2週間に一度会合があり、忙しい時期を迎える。

この中心となる鬼祭保存会とは別に、各町の役保存会も存在する。中世古町赤鬼保存会、西新町御神楽保存会、談合町鬼祭り保存会などである。各町の保存会は町の中心となり役の運営を行い、その中でも鬼祭保存会に参加する人が、祭礼の全体を把握する形に



図4 赤鬼と天狗のからかいの様子
2017年2月11日に筆者撮影。

なっている。次節では、聞き取り調査⁴¹⁾ から判明した各町の活動をまとめる。

(2) 各町の豊橋鬼祭に向けた活動

役は基本的に町内で選出される。大人の役と子どもの役では選定の基準が異なっており、大人の役に関してはそれまでの祭礼への参加の度合いも考慮される。特に赤鬼は中世古町で生まれ育った人であることが条件に加わっている。この条件は、鬼役に限らず赤鬼運営の中心となる神事係についても同様である。その中で祭礼に貢献していて神役を希望し、家庭の事情も差支えない人が、神役を決める神事「御籤の儀」に参加する。また飽海町の天狗は、天狗を行う前には床几持ち、薙刀持ちを経験し、天狗の後には天狗の付き添い、保存会の役員を務めることになっていて、数年間は役と向き合うことになっている。

一方、子どもの役を選出を継続することは現在の少子化も相まって、厳しくなっている。子鬼を出す札木町では、5、6年先まで内々に見据えており、適切な人がいない場合は、町内の住民の甥といったように、町外の子どもを呼ぶことがあるという。子鬼の行列に付き、遊びと呼ばれるタンキリ飴や粉をまく人々(120~150人ほど)も札木町の住民だけでなく、住民が声をかけた人からなっている。また八町通三丁目の青鬼は、今のところ町内の子どもが役を担っているが、この先続くかどうかわからないと心配する声もあった。なお、青鬼の神事が平日になる場合には、役を務める子どもは公欠扱いとなる。また、町内の小中学校の生徒は学校行事として祭礼を見に来るなどしている。このように、小中学校の協力的な面が見受けられ、豊橋鬼祭は地域の子どもたちまで浸透している様子が見えがえる。

役が決まる時期も町ごとに様々である。先述の通り、数年先まで見据えている飽海町や札木町のような町があれば、祭礼の直前、1

月の最終土・日曜日に「御籤の儀」で役を決める中世古町のような町もある。赤鬼の神役に決まると、翌日から精進潔斎の期間として若い女性との接触が禁じられ、メディアの利用が制限され、私的な外出もできなくなるといふ。精進潔斎のため肉食を禁じた上で鬼役の練習が行われるため、練習が始まると体力はつく反面、痩せていくと赤鬼経験者は語る。精神的にも体力的にも厳しい役だが、中世古町の参加者はみな神役を目指しており、子どもたちのあこがれの役でもある。中世古町の行事は「御籤の儀」から門寄まで全て神事であり、神事だからこそ続けなければならず、時代に合わせて変えることもしないと中世古町の役員は語っていた。

本格的な役の練習は、2月当初から祭礼まで、主に夜に行われている。それ以前にも、動きの確認など、各自練習をしている。また、中世古町は早朝も練習を行っており、神役は仕立てられた着物を着て安久美神戸神明社まで往復する。また、練習は褌と浴衣のみで行う。

祭礼の直前、2月8~10日は飽海町の天狗と合同練習を行う。子どもの役の練習は1月半ばに始まり、主に土・日曜日に行われている。練習の指導はその役の経験者や長年指導に携わってきた人などが担う。役の所作は練習の中で、役から役へ、指導役から指導役へと受け継がれていく。所作を変えることは許されておらず、赤鬼の中世古町では録画した所作を見せることもしないという。教え継がれてきたことをそのまま教えていくということ大切にしている。

各町の保存会は、12月から1月にかけて本格的に動き出す。それ以前にも物品の発注などの諸準備は行われている。八町通三丁目では、祭礼の前は忙しいため、10月末頃にわらじの製作を行う。そして年明け頃からはどの町も祭礼のことで非常に忙しくなるという。八町通三丁目の保存会役員は、「1月は祭り

のことでほぼ家にいない」と述べる。中世古町、札木町、八町通三丁目が出すタンキリ飴や、飽海町が出すあられといった供物類はどの町も1月末から2月初めにかけて準備が行われる。

また、中世古町の赤鬼保存会の集まりは毎月ある。そのため、中世古町の住民は祭礼のことを一年中意識しているという。生まれてから豊橋鬼祭があることは当然で、自分たちの常識と考えている。中世古町の役員は、2月に入ると、仕事以外はすべて祭礼のことをやっており、また仕事でも祭礼が気にかかる」と語っていた。

豊橋鬼祭に携わる人は、近年の人口減少もあって、人手不足であるという。飽海町では、人に残ってもらえるように、高校生などの若い人に祭礼に参加してもらおうといった工夫をしている。人手不足はあるものの、現在4町⁴²⁾すべて、祭礼に関わる人は町内の人、もしくはその家族親戚、かつて住んでいた知り合いなどに限ることが多く、他の大きな祭礼でみられるような、アルバイトを募集するということはないという。供物の準備は数も多く大変なため、氏子町に限らず、町内の組長や子どもたちに参加してもらおうなどして人手を集め、町総出で行っている。また中世古町では、町内の全世帯から必ず1人は参加するようになっていく⁴³⁾。

一方で、祭礼の見物人は昔から多かったが、近年さらに増えている。特に安久美神戸神明社のSNS開始にともない、2002（平成14）年頃から見物人はいっそう増えたという。そのため、出店等の屋台も減らした。人が増えると「からかい」のスペースを確保するなど警備が大変になることはあるが、どの町の役員も、見てくれる人が増えることはうれしいと語っていた。町内廻りについても、廻る戸数が増えることは負担ではなく、うれしいことだという。

現在の豊橋鬼祭に関わる人々への聞き取り

調査の結果は以下4点にまとめられる。①どの町も神事の内容を違えぬよう、きちんと伝えていくことを大切に思っている。そのため、役を確実に確保していけるように努力している。②保存会役員はほぼ1年中豊橋鬼祭に関わっており、年末ごろから特に忙しくなる。③見物されることや祭礼が盛大になっていくことに関しては負担よりうれしさが勝る。④祭礼に関わることのできる人はその町の人間か、親戚や知り合いの関係者に限られる。

現在、役がそれぞれの町によって担当されている状況は、1つの役を確実に遂行していけば良いという点で、非常に上手くいっている。また、祭礼に多くの町が関与する状況に伴う対抗関係も、鬼祭保存会の存在によって上手く調整されている。

(3) 豊橋鬼祭が継承されてきた要因

豊橋鬼祭は、短くとも400年以上続いてきた。本節では祭礼の継承について考えるために、豊橋鬼祭がここまで続いてきた要因を検討する。

豊橋鬼祭の約400年の歴史の中で、大きな画期の1つとして、第Ⅲ章で検討した役の分配と新設が行われた時期をあげることができ。対照的に、現在、祭礼に携わる人々が口々に述べるように、役の所作や神事の内容を変えない努力がなされている。以上2つのことを踏まえると、祭礼を担ってきた氏子町が、戦争や人口構造の変化に伴い、祭礼が存続できるかという岐路に来たとき、選択したのは、誰が役を担うのかではなく、いかに神事の内容を残すかということだったといえる。

近世から近代に移る段階で、祭礼が途絶えてしまった例として仙台祭がある。仙台祭は、仙台東照宮の祭礼で、城下町の町人町である「二十四ヵ町」が輪番制で練物を出し、行列を行っていた。仙台祭においては、祭礼に参加できることが町の正統性の証明になる

ほど、町が基盤となった祭礼であった。しかし、幕末になると、練物は町ではなく個人から出されるようになり、町は行列の組織者としての存在感を薄めていった。そして、最終的に1899（明治32）年を最後に行われなくなる。幕末期から明治期にかけて、町の力や存在が弱まることに伴って祭礼の基盤を失ったことが、祭礼が途絶えた1つの原因ではないかと考えられている⁴⁴⁾。また、仙台祭においては、どの町がどの山・鉾・屋台を出すかが非常に大切になっていたため、もしその町が参加できない場合には、他の町が代わりに出すわけではなく、不参加として扱われていた⁴⁵⁾。

豊橋鬼祭でも祭礼に携わってきた町が縮小し、その基盤が崩れかけたが、役を分配することで継続した。豊橋鬼祭は、神事を残すことを優先したためであろう。また、呉服町が戦災によって神楽を奉仕できなくなったときも、両神楽の奉仕を中止するのではなく、西新町が継承するという形がとられている。

近年、見物人が増えた際に神事を行うスペースの確保を重視し、食べ物や商品を提供する屋台を減らしたことも、祭礼の内容を重視するという姿勢によるものであろう。ここに豊橋鬼祭の特色が見いだせよう。

さらに、豊橋鬼祭は、各町が役を持っている今の状況でも、それを取りまとめる鬼祭保存会があるからこそ上手く運営されている。豊橋鬼祭がここまで継続してきたのは、神事内容を大切にしたこと、そのための柔軟な対応をしてきたこと、各町を取りまとめる鬼祭保存会が機能していることに要因があると考えられる。

V. おわりに

本稿では、豊橋鬼祭を事例に、近代における役・神事の展開過程を復原し、その要因について明らかにした。さらに、現在に至るまで祭礼が継承されていることの要因を考察

した。

まず、豊橋鬼祭の展開過程を検討したところ、豊橋鬼祭における大きな画期の1つは、近代から現代における役・神事の分配であり、その分配時期の差異には、各町の歴史的特徴、特に飽海町との関係が影響していたと考えられる。

さらに、現在の豊橋鬼祭の運営方法について、運営者に聞き取り調査を行うことで、各町が役を奉仕するにあたって、神事や役の所作を重んじる姿勢がうかがえた。さらに、役を各町が持ち、鬼祭保存会によってまとまる体制は、祭礼を着実に運営していく上で上手く機能していることが読み取れた。

役・神事の展開過程や祭礼に関わる人々に着目することで、これまでの工夫や努力によって豊橋鬼祭が継承されていることが明らかとなった。

豊橋鬼祭に限らず、近現代に移行する中で、変革期を迎えてもなお続く祭礼が多くある。これらの祭礼で、現在は担い手不足という問題に直面しているものも少なくない。前近代から続く祭礼が、現在までどのように展開・継承されてきたかを研究することによって、今後祭礼を継承していくための方法を考えていく手掛かりとしたい。

（愛知県立大学卒業生）

〔付記〕

本稿は2017年度愛知県立大学日本文化学部歴史文化学科卒業論文を加除修正したものである。本稿の骨子は、2018年5月歴史地理学会大会において発表した。本稿作成にあたり、安久美神戸神明社宮司の平石雅康氏をはじめ、アンケートにご協力いただいた鬼祭保存会の行事部会の方々、聞き取り調査にご協力いただいた飽海町、中世古町、札木町、八町通三丁目の各町保存会役員の方に厚く御礼申し上げます。

〔注〕

1) 渡辺康代『近世城下町の付祭りの変化—伊

- 賀国上野と下野国烏山を事例に一』海青社, 2020, 286頁。
- 2) 本多健一『中近世京都の祭礼と空間構造—御霊祭・今宮祭・六斎念仏—』吉川弘文館, 2013, 146頁。
 - 3) 渡辺康代「宇都宮明神の『付祭り』にみる宇都宮町人町の変容」歴史地理学44-2, 2002, 25-44頁。
 - 4) 本多健一「近世後期の都市祭礼における空間構造—京都の今宮祭を事例に一」人文地理64-1, 2012, 1-18頁。
 - 5) 遠城明雄「都市空間における『共同性』とその変容—1910～1930年代の福岡市博多部—」人文地理44-3, 1992, 341-365頁。
 - 6) 平篤志「東京都千代田区神田地区における人口減少に伴うコミュニティの変容」地理学評論63-11, 1990, 701-721頁。
 - 7) 佐藤弘隆「京都祇園祭の山鉾行事における運営基盤の再構築—現代都市における祭礼の継承」人文地理68-3, 2016, 273-296頁。
 - 8) ①山崎一司「修正会の地方化と鬼の変容—愛知県平野部の『鬼祭り』・『はだか祭り』を中心に」民俗芸能研究35, 2002, 25-51頁。②山崎一司「鬼の受容と展開—愛知県豊川下流域の祭りの鬼を中心に」民俗芸能研究37, 2004, 53-74頁。
 - 9) 池田輝政に同じ。1607(慶長12)年までは、照政と自書しており、それ以降は輝政と自書していた(半谷健司『逐城解説 詳説・吉田城と池田照政』オフィス・ハニー, 2009, 21頁)。
 - 10) 岩瀬彰利『戦前の豊橋—豊橋空襲で消えた街並み—』人間社, 2016, 101-103頁。
 - 11) 吉川利明『豊橋の町名の変遷』豊橋文化協会, 1976。
 - 12) 豊橋寺院誌編纂委員会編『豊橋寺院誌』豊橋仏教会, 1959, 3-14頁。
 - 13) 和田実「古記録・古文書による手筒花火」『東三河地域を中心とする手筒花火の基礎調査報告書』愛知大学三遠南信地域連携センター, 2007, 21-25頁。
 - 14) 安久美神戸神明社『安久美神戸神明社千年誌』1974, 29頁。
 - 15) 安久美神戸神明社への聞き取り調査および
 - 岩瀬彰利『戦前の豊橋』人間社, 2016, 55頁。
 - 16) 前掲14) 236頁。
 - 17) 前掲14) 32頁。
 - 18) 豊橋市史編集委員会編『豊橋市史 第2巻 近世編』豊橋市, 1975, 969頁。
 - 19) 前掲8) ①②。
 - 20) 山崎は、吉田城下町が宿場町であり、田楽法師のような芸能関係者が出入りしていた関係で、田楽を取り入れた修正会の追儼が行われるようになったとする。前掲8) ②65頁。
 - 21) 1868(明治元)年～1878(明治11)年は談合宮町。
 - 22) 豊橋市広報広聴課『春を呼ぶ、鬼と天狗とタンキリ飴 豊橋鬼祭り。』豊橋市広報広聴課, 2014, 44頁。
 - 23) 1868(明治元)年～1878(明治11)年は中瀬古町。
 - 24) 前掲22) 30頁。
 - 25) 前掲14) 108-110頁。
 - 26) 豊橋市史編集委員会編『豊橋市史 第7巻 近世史料編下』豊橋市, 1977, 645-650頁。
 - 27) 「角川日本地名大辞典」編纂委員会編纂『角川日本地名大辞典23 愛知県』角川書店, 1989, 1231頁。
 - 28) 鬼祭札木町子鬼保存会編『札木町 子鬼生誕百年の歩み』鬼祭札木町子鬼保存会, 1982, 4頁。
 - 29) 前掲14) 241頁。
 - 30) 豊橋鬼祭保存会・豊橋鬼祭奉賛会・豊橋商工会議所・豊橋観光コンベンション協会『平成28年豊橋鬼祭 栞』2016, 83頁。()は筆者が付記。
 - 31) 1958年の区画整理により旭本町と分離。前掲27) 91頁。
 - 32) 飽海町の住民が中世末頃に開発した土地。前掲27) 83頁。
 - 33) 大正時代の調査によると、1838(天保9)年における神役は、飽海町、中世古町、牛河若宮のみで行われており、そのうち司天師は牛河若宮の人々が務めている。前掲14) 181頁。
 - 34) 前掲14) 248頁。

- 35) 八町通三丁目の役員への聞き取り調査より。
- 36) 豊橋鬼祭保存会・豊橋鬼祭奉賛会・豊橋商工会議所・豊橋観光コンベンション協会による2008～2018年の『豊橋鬼祭 栞』に描かれたルートによる。
- 37) 前掲15) および22) 47頁。
- 38) 五十鈴神楽は11日にも行われる。
- 39) 筆者が2017年9月23日に各町に対して行ったアンケート調査より。
- 40) 前掲30) 180-181頁では、評議員(兼(企画・広報委員会, 財務委員会), 特別委員会, 部会(行事, 絵画コンクール, 栞)と記述されているが, ここでは表向きではなく, 携わっている人の感覚を記述したいため, 聞き取り調査の結果に従う。
- 41) 2017年10月～11月にかけて, 中世古町(赤鬼), 飽海町(黒鬼・天狗), 札木町(子鬼), 八町通三丁目(青鬼)の役員に聞き取り調査を実施した。
- 42) 聞き取り調査を行った中世古町, 飽海町, 札木町, 八町通三丁目の4町。
- 43) 中世古町は, 2015年の国勢調査においては世帯数が128世帯であり, また2017年9月に行った宮司への聞き取り調査では, 中世古町の氏子戸数が135戸であった。このため中世古町は, ほぼすべての世帯が安久美神戸神明社の氏子であるといえる。
- 44) 政岡伸洋『仙台の祭りを考えるための視点と方法—民俗学の立場から—』大崎八幡宮, 2012。
- 45) 小井川和夫「仙台祭りについての覚え書き」東北歴史博物館研究紀要2, 2001, 137-146頁。